

## シシ狩り儀礼とイカリワケ — 島根県江津市桜江町長谷山中の事例 —

鈴木 良幸（宮崎大学）

本報告でとりあげる島根県江津市桜江町長谷山中地区の儀礼は、「山中のお改めとシシ狩り行事」として 2020 年に記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている。催行場所は、山中地区に鎮座する山中八幡社および隣接の甘の宮である。祭日は、牛尾によれば天明 6 (1786) 年までは旧 12 月 13 日であったが、以後旧 3 月 13 日に変更されている〔牛尾三千夫 1986『大田植の習俗と田植歌』名著出版 100 頁〕。現在は、当該日に近い日曜日に催行される。

「山中のお改めとシシ狩り」儀礼は、二つの要素からなる。一つは、御神体とする米を甘の宮から山中八幡社へ迎えて拝見し、米の状態から当年の農作物の豊凶を占う「お改め」。もう一つは、三方に載せたシシ団子（シシに見たてる）と呼ぶ粢を弓矢で射てのち、切り分けて参会者に分配して共食する「シシ狩り」の要素である。古くは共食のためにシシ団子と大根の銀杏切りを味噌煮にしたという。「シシ狩り」は山中八幡社拝殿でおこなわれ、イカリワケ神事とも呼ばれている。

本報告の目的は、この「シシ狩り」儀礼と山中地区における実際の狩猟活動との関係を、「イカリワケ」概念を通して考察することにある。先学の研究では、イカリワケは「猪狩分け」または「射狩分け」であり、弓矢で射たイノシシを分配して分ける儀礼であると指摘されてきた〔野本寛一 1993『稲作民俗文化論』雄山閣 410 頁など〕。では実際の狩猟活動におけるイカリワケは、どのようにおこなわれてきたのだろうか。

報告者の聞き取りでは、山中地区でシシといえばイノシシを指し、分配は狩りをした仲間に対しておこなった。仕留めた者を一番矢と呼び、一番矢には、頭、後ろ脚、前脚などから好きな部位一つが与えられた。後ろ脚を取る者が多かったという。残りは、肉を骨からはずして一番矢を含めた人数分の山に盛り、山の大きさを揃えて、下げさせて重さを確認し、均等割とした。解体後には鍋をした。大鍋に、肉の残った骨、心臓、肺、睾丸を入れ、砂糖と醤油で味つけた。それを飲み食いして、終了はおおよそ 12 時前だった。頭と他の内蔵は処理が面倒だという理由でもらう者がなく、宿がもらうことが多かった。この事例では、頭と内蔵は宿がもらい、骨は大鍋で共食している。つまり、均等分配されるのは肉の部分であることが分かる。

聞き取りに加え、これまでのイカリワケに関する研究を調査した。その結果、イカリは分配の際の肉の一単位であり、それを取り決めに従って分配することをイカリワケと呼ぶことが分かってきた。これは、九州の米良山地や椎葉村で用いられるタマスやタマスワケに類似する概念である。加えて、イカリワケの語の分布は、東は島根県江津市、西は山口県長門市まで広がっていることが確認された。さらには、早川孝太郎がアチックミュージアム彙報第一五に報告した『猪狩古秘傳』にも「手伝いのものはかりへいかりわけつかわす」とあり、近世初期の山口県岩国市付近の事例を記していると比定されており、当時から用いられていたことが示唆される〔千葉徳爾 1969『狩猟伝承研究』風間書房 728 頁〕。

上記のことから、山中のシシ狩儀礼と実際のシシ狩における分配共食の共通点は、①切って肉のかたまり（イカリ）をつくる点、②それを分配する点、③煮などして食べて共食する点、にあるといえる。このプロセスを地域の祭として、神前でおこなう点に意義をもつといえるだろう。